

第1回 5月6日

「姫岡・中川・岡野・池内共編『労働のジェンダー化』(平凡社/2005)を読む」

報告者：崎山政毅(本学文学部), 高橋裕子(本学非常勤講師)

「姫岡・中川・岡野・池内編 『労働のジェンダー化』を読む」

崎山政毅

なぜ私が今日の書評者に選ばれたのかという問いがありますが、叩かれる対象として招かれたという勝手な自己了解からはじめさせていただきます。私はラテンアメリカと近現代史と思想史を専門としていますが、そのさい深く関連する対象として周辺資本制の問題があります。この周辺資本制の問題に関しては、古田睦美さんが訳されたマリア・ミースたちの仕事から多くを学んでいると同時に、彼女らの論の中にどうしても肯定しきれない点がいくつか存在しています。それらの論点をめぐる批判を基点のひとつとしながら、この論集を読んで受け取った印象からお話させていただきます。一本一本の論文の内容をどう受け取ったかをお話することが合評会においては当然のことでしょうが、今日はある種のトリックスターとしての役を果たそうということで、場にそぐわないかもしれませんが抽象的な話をさせていただきたいと思えます。

さて、私が問題として受けとめたところはどこかと言いますと、これはけっしてネガティブな受けとめではなく、議論を惹起するような「ずれ」に関わっています。本の構成を見てみると、アンペイドワークとセックスワークという二つの問題群によって分けられています、もちろんこうした区分は、構成上の作法としては十分に理解できるところです。

ただし、その両者の間に重要な「ずれ」が存在していることは否めません。つまり「ずれ」というのは、この両者をどのようにつないで論じることができるかに関わっているわけです。論集の中では金友子さんが書かれた従軍慰安婦と奴隷的性労働のメカニズムとの連関をめぐる論文が、双方をつなぎうる回路への糸口を提示しているように思われたいわけではありません。しかし、この本においても、そして様々な論者にあっても、セックスワークとアンペイドワークをめぐる立場の間に大きな溝があるということを認めざるをえないのではないのでしょうか。まずは各々の領域についての意見を述べさせてください。

最初に、第二部「セックスワークは労働か」についてです。きわめて切実な問いがそのままタイトルにされているわけです。ここで使われている「労働」というカテゴリーは、フェミニズムによる批判的な提起までの古い論議や、既存の社会理論・学説の中では、はなはだ固定化したものとして扱われてきたことは言うを俟たないことだろうと思えます。

具体的な事例として挙げられるのは、上野千鶴子さんが最終的に『家父長制と資本制』(岩波書店)にまとめられた『思想の科学』の誌上での連載のさい、彼女に対する「古典的な批判」が出たことです。これは上野さんの本の中にも補論として収録されています。そこでの「古典

的批判」というのは、次のようなものでした。家事労働は、生産労働を主要な対象としてきた伝統的なマルクス主義・正統的なマルクス経済学の立場からすれば不生産労働であるから意味がないというのが、その要旨です。

私の観点からすると家事労働の状況、家事労働が営まれる場において権力関係があるわけですから、そのことを「不生産労働だから考えなくていい」という議論は成り立たない。さらに、労働をめぐる問題設定は、たしかに今でもじっさいに物をつくりだす生産が資本制の基礎ですから生産労働をとりあげる必然性があるにせよ、マルクスが取り扱った19世紀的な工場労働の圏域にはおさまりきれなくなっています。暴力的に構成される「労働力商品」たる人間を維持・再生産することなくして生産労働はおぼつかないのですから、労働力商品の再生産過程に密接に関連する家事労働をはじめとした社会的実践を、生産労働とリンクさせて論じることはきわめて重要です。

ともあれ、「家事労働＝不生産労働」という「批判」がなされたとき、そこでは情性的に固定化されてきた「労働」というカテゴリーが非常に抑圧的に働いたことを確認しておきましょう。こうした傾向はまだましなほうかもしれません。本音のところでは、家事労働を労働として認めない、認めたくないという強力な男性中心主義的・ブルジョア的な忌避感があるように思いますから。そのような傾向がはたらいているなかでは、セックスワークが労働であるかという問いは言うまでもなく「論外」のこととして捨て去られてしまいます。この重苦しい抑圧や束縛について批判を対置されているのが江原由美子さんの論文だろうと思います。ここで注意しておきたいのは、今のところさしあたり、家事労働をはじめとするアンペイドワークとセックスワークを同じではあっても曖昧な土台の上で私は論じているということです。

さて、江原さんの論の中で大切なことだと思われるのは、セックスワークを労働として認めた場合に買春者の行動や存在を許してしまうことになりはしないか、労働として認知されたさいにのしかかってくる重圧はどうなのか、という危惧です。この危惧はまさしく正鵠を射ています。「労働」と言ったからことが済むわけではないのは当然の前提だと思います。それと同時に、水島希さんが書かれているように、労働と認められようと認められなかりと、セックスワーカーにとって労働組合的な運動が必要なのだという現場からの要請も前提におかれなければいけない。しかしこの際に使われている労働というのはきわめて一般的なカテゴリーです。

ここでマルクスを参照項として批判的に導入したいのですが、彼は労働をめぐるどのような論を立てているか。その眼目は「生きた労働」をめぐる問題でしょう。マルクスが重視しているものは、商品の価値の実質（邦訳ではしばしば実体と訳されています）たる抽象的人間労働ですが、それは資本制に縛られ支配された、資本によって包摂された労働における価値の生産をめぐる出てくるものです。具体的な個々の労働者の存在などどうでもよく、商品にすべての人間の労働行為が平準化されて込められてしまうような社会的機構のなかで、商品の価値となる実質が抽象的人間労働とされているわけです。それに対置してマルクスは「生きた労働」を考えています。

これは比喻としては、次のように考えられます。機械であつたら投入したのみに見合った生産ができる。インプット、アウトプットが自動的にでき、技術的に対応関係があるわけです。しかし、人間においては投入されたものは生活物資ですね。労働者が生産し、自分自身の労働

力を再生産する際に必要とされる生活の上で必要な物資です。これがどんなに投入されようと、機械ではない人間としては、それに見合った形でアウトプットが自動的に出てはこない。出てくるはずもありません。同時にこれが働くということをめぐっての喜び、苦しみという、抽象化されえない領域、どれほど抽象化されようが残ってしまう領域をふくんだ問題設定をマルクスは考えていたわけです。

この「生きた労働」という観点は、労働力の再生産労働としてのアンペイドワークという観点とならんで、アンペイドワークを論じるさいの問題設定に含み入れることができるでしょう。

しかし果たして、「生きた労働」という観点をセックスワークに対して与えることができるでしょうか。これは名づけの問題ではありませんし、ましてや道徳的な問いではありません。「生きた労働」という概念にマルクスがロマンティックに込めてしまったさまざまな可能性をセックスワークの場面において接続することが可能なのか、という問いなのです。

私の結論を先に述べておきますと、「労働」というカテゴリーのラディカルな刷新（転覆的刷新といってもよいかもしれませんが）なくして、接続はおろか導入することもはばかれる問いだと思います。

商品価値に関して、マルクス経済学の基礎となっている契機は、「労働時間」と「労働強度」です。資本による指令のもとで人間性を剥奪されて働いている労働の強度が問題になる。資本家への時間的自由の譲渡としての「労働時間」や、身体的な束縛のもとでの労働力の投入とその持続としての「労働の強度」が、いかにして社会的支配のシステムをつうじて抽象化・平準化されるか。そこには、どういう形で自分たちが支配され、自由な労働として奴隷のあり方になっているのかということが大きな問題として現れてきます。

それにもかかわらず、セックスワークをめぐっては、「労働時間」と「労働強度」の話はなかなか出てきません。水島さんの論文の中での当事者の問題を労働時間、労働強度の設定にすべて還元することはできないにしても、現にセックスワークに携わって働いている人々にとってみて、働いている時間がどういう質の「時間」であって、どのような「強度」が強いられているかが問題にならざるをえないのではないのでしょうか。これは一般的にセックスワークを労働と認めるか、認めないかという話ではない。つまり、「労働」というカテゴリーをたんに敷衍して、そこにセックスワークを包含するだけではすまないことです。そうではなく、現に働く当事者がどういう「形」でセックスワークをめぐる支配関係に入るかが問題になる。

ところで、労働が資本のもとに包摂され、そして支配のもとで価値を生産する労働としての生産労働はマクロなシステムのもとで構成される抽象的労働に行き着きます。この場合の主体は資本です。

ところがセックスワーク、アンペイドワークの場合もそうですが（図式的に片付けることはできないのですが）、ミクロなレベルで展開されている、個々の人間の実践です。ここで人間のというのは、ヒューマニスティックという意味ではありません。人間が行う、それぞれのセックスワーカーが行う固有で具体的な実践あるいは行為である、ということにほかなりません。

アンペイドワークの場合には、賃金の問題をつうじて（とはいえ行為がサービス労働として「中立化」されたあげくに価格がつけられるという意味での賃金の問題化には疑問を投げかけざるを得ませんが）、資本 賃労働のマクロなレベルとの理論的な回路を設定しうでしょ

うが、セックスワークの場合はそう簡単にいきません。なぜなら、一応のところペイドワークであるからです。しかしセックスワークへの「対価」として支払いがあるうとも、焦点となるべき問題は支払いの有無に、あるいはその多寡に存しているわけではないことは言うまでもないことでしょう。

「労働」を批判的にそして開かれたかたちで考えようとすることは、同時に権力関係を考えること、支配関係を考えることであり、また人間が行う行為の中に、人間が紡ぐさまざまな社会関係の中に自らを解き放っていく、より自由に平等になっていくような契機や可能性を認めることである、そのように私は思います。単なる現状追認であるような分析は、無意味です。ミクロとマクロの異なる次元を結びつけ、そこに権力批判としての自由と平等の実践的な可能性を提示することこそが課題であるはずで

その際、ミクロなレベルとマクロなレベルをつなごうとする試みの中で、権力論にかかわって私が思いおこすのは、1970年代末にニコス・プーランザスが書いた『国家・権力・社会主義』というユニークなテキストです。そのテキストの中でプーランザスは、フーコーに対する誠実な、しかし片恋に終わってしまった批判をしています。

フーコーといえば、ミクロ権力、ミクロなネットワークとしての権力化の問題にしばしばつなげられています。ミクロ権力においてはセクシュアリティの問題が端的に出てきますが、これひとつをとってもミクロなネットワーク権力という観点は、大切なあたりまえのことです。しかしミクロな関係だけでは資本と国家の権力は解き明かせない。少なくともフーコーはそのことに気がついていたと思いますが、資本あるいは国家といったマクロな権力関係を主題にはしなかった。

こうした点について、「ミクロな関係が紡がれる近代市民社会、商品社会は一体何なのかとマクロな問題も同時に考えることが大事だ」とプーランザスは『国家・権力・社会主義』の中で書いているわけです。どちらも別々だという話をしてはいるわけではなく、マクロにすべてを還元するような発想が議論を仕切ってきて、そしてそれが男性支配・異性愛支配の現れだったことに対する批判として、プーランザスの提起を読みとるべきでしょう。

ミクロに存在しているものが、なぜマクロな力のもとにつながとめられるのか、そしてまたマクロな力だけではうまく機能しない権力のありようはどうなのか。このことがプーランザスを苦しめた問題でした。彼の格闘（私は理論的には失敗に終わったと思っていますが）のなかで指摘として正しいと思うのは、「権力というものは物として存在しているものではなく、紡いでいる関係のあり方に権力の凝集が生れ、それが強制力、執行力を持ってしまう」とする、関係論的な観点です。しかしプーランザスは、凝集にもとづく権力の諸次元・諸審級の結合状況を、つまりマクロとミクロとここでは呼んでいる関係権力のあいだの関係性ですが、分節化できないまま夭折してしまった。そしてこの失敗はまだ乗り越えられていないと思います。

私自身は資本制の原理を資本の側のシステム分析ではなく、人間の側に「差し替え」をおこなった際に、ミクロなレベルとの迂回路としての「接合」ができると思っています。社会総体の主体を仮構する資本への批判としての理論的解明の結果を、具体的な人間の生活次元における対抗実践として読み替えるという迂回路をたどることで、「接合」が可能ではないのか、ということ。それはこれまで様々な論者が取り組んできた、資本制と近代家父長制の関係です。

先ほど挙げた上野千鶴子さんの『家父長制と資本制』では、それぞれを別個のものとしてとらえてしまっていますが、そうではなく、主体批判としての資本批判において近代家父長制批判が同時遂行され、あらためて変革主体としての私たちが設定されるようなかたちを考えるとと思います。

さて、権力は物ではなく関係の問題だと述べました。では、権力関係をとらえる際にセックスワークはどういう関係をめぐる働きであり、いかなる活動なのか。このことが問題になります。付け加えるならば、「労働」としてのセックスワーク(あるいは「労働」とセックスワークとの関係)をめぐる議論を、自己意識、自己決定権の話に持ち込むべきではありません。なぜなら近代における労働が支配的な社会関係への包摂をはじめとする構造的で社会的に納得を強制するような広義の「暴力」を根底に構成されてきた点をふまえるならば、現実の過程において物質的に・客観的に・働いてしまう暴力が問題だからです。自己意識や自己決定だとなると、人格論的な設定をしてしまうと、道徳か啓蒙の問題となるでしょうが、道徳や啓蒙、つまりはイデオロギーが決定的な物質力をそなえるための政治がつねになおざりにされているのはどういことでしょうか。

人格論の陥穽というのは、セックスワークに関しては、しばしば無批判な前提としてセックスワークに対する侮蔑や非難が底流におかれ、それが対象化されないままに、「自分でそれを選んだんだから、ひどい目にあっても当然だ」となってしまう圧力が形成されてしまうことが挙げられます。アメリカ合衆国の判例などが端的ですが、セックスワーカーが買春者から暴行を受けても「当然」であるという結論がしばしば出てきている。「自由な労働に関する自己決定の上での選択」だから、暴力の被害者に原因が求められるようなあり方です。自己決定が本当に自由に存在しているのでしょうか。違います。そこに働いている強制力や、暴力だと名付けることも困難な強制力の行使こそを摘出し批判する課題や任務があるはずで

ここでは圧倒的な傾向性をともなっているヘテロセクシュアルに展開されるセックスワーク、男性買春者と女性のセックスワーカーの間の問題に限って述べたいと思います。買春者の男性は、「売る側」であるセックスワーカーの時間と身体とを対価である貨幣と引き換えに支配できるような幻想を抱く、と一般的に設定できるでしょう。セックスワークの「労働時間」の間だったらどうしてもいい、セックスワーカーを殴ってもサービスのうちに入るという恐ろしい幻想です。そしてそこで現実には起こっているのは、セックスワーカーの身体を「労働現場」としながら、その同じ身体をある種の「労働手段」かつ「労働対象」として産出される、関係行為・関係形成の結果としての「サービス商品」です。

この「サービス商品」はきわめて非対称なものとなります。買春者の側は「サービス」を請求し受け取るという「関係」の形成を、女性の身体と時間を限定つきではあっても「所有」している想定のもとに行うわけですが、セックスワーカーの側からすれば、ある種の契約的な奴隷状態におかれることとなります。ただ非対称であるのではなく、そこにはきわめて危険な齟齬があるわけです。この齟齬がまかりとおるような状態の現出が、セックスワークをめぐる権力関係として出てくると考えることができると思います。

その権力関係においては、女性が自らセックスワークという「仕事」を選んだか否かという選択は意味をもちません。そこに現象するのは、工場労働やサラリーマンの労働を通念として

考えられる「ふつうの労働」の概念には還元されない具体性を持つ、暴力と齟齬に満ちた非対称な関係です。そのような関係が売買の名のもとでは、セックスワーカーの側に利するようなかたちで取り上げられずに、買春者の側の暴恣を合理化するように働いてしまう。

この際には、売買であるから一つの資本制的公益の問題として、社会契約の問題として権利を保障することもセックスワーカーの権利要求の中には入りうるわけです。しかし、権利を確保することが大切であるにしても、それでセックスワーカーが自由になったり、平等になったりするわけではないことを、私たちはどう考えることができるのでしょうか。

こうしてみると、私たちは、セックスワークの問題圏に、植民地主義や人種主義のもっとも原初的で激烈な姿型と同質のものを見て取ることができます。ここに、実践的批判を介したアンペイドワークとの接合の道筋を考えることもできるのではないかと、と思います。

では、アンペイドワークに論を移しましょう。ジョアンナ・フランカ・ダッラコスタが『愛の労働』において描いたように、家事労働にセックスもまた含まれており、広義のセックスワークはアンペイドワークとの重合領域をなしています。そこには具体的な家父長制の問題も出てくるわけですが、紡がれる関係は似通っているわけです。しかしアンペイドワークの場合には、より社会契約の質が強いとみるべきでしょう。なぜなら、資本-賃労働における「ペイド」に対置されるかたちで、「アンペイド」がまずは導出されているからです。

この場合のアンペイドワークは古田さんの論文の中ではグローバルなレベルで考えられています（この点をめぐってはジョアンナ・フランカ・ダッラコスタが『家事労働に賃金を』の著者である姉のマリアローザ・ダッラコスタと二人して、開発批判の経済学に取り組んでいることにも思い至ります）。これはマリア・ミースたちが立っているサブシステムの重視であり、ベンホルト＝トムゼンの仕事に現れているような「継続的本源的蓄積」のもとにおける継続的な形式的包摂の抉り出しということにつながります。

彼女たちは資本制を成立せしめる「本源的蓄積」の問題を、その一回性の強調という旧来の主張に対置した、反復と継起の考え方のもとに見ています。これは非常にユニークであり、大切な論点であることはどれほど強調しても足りないほどです。ただし一方で、西洋男性がプロレタリアートのモデルだとする起源遡及的な歴史主義に陥っているのはいただけません。マルクスの理論がかかえる男性中心主義・西欧中心主義の基盤としての歴史的被規定性としての限界に対する批判という姿勢は一定理解できるのですが、マルクスに論点が収斂されてしまっているくらいは否めないからです。少なくとも、マルクスを最初に経済学批判に導いたエンゲルスの『国民経済学批判要綱』においてさえ女性労働の問題はとりあげられていたことが述べられていますし、『資本論』のモデルとなったイギリスでの機械制大工場において労働者から女性が排除された社会的メカニズムの成り立ちは、たんにイデオロギイ的な批判ではすまないことを指摘しておきます。

少し本筋をはずれますが、次のような疑問も述べさせていただきたく思います。セックスワークが論じられているにもかかわらず、本書では正面きってのセクシュアリティの問題が出てきていないことにも若干かかわりますが、起源遡及的な言い分はゲイル・ルービンの論文「私たちの交易」の中に端的に出てきます。

マルセル・モースの贈与論的な問題設定を軸にして（とはいえモースの再読に関するこの間

の取り組みはまったく無視されていますが), 前資本制的諸社会において女が「財」としてあつかわれたことが、実は近代資本制のもとにおける売買行為の根源になっている、とルービンは言っています。しかし、これは理論的にはどうでしょうか。女性をモノ扱いするという点にばかり批判が向いており、当該社会において「財」であることが女性にとってどのように機能したかが捨象されていることにも関わります。ともかくも、資本制に「先立つ」(?) 女たちが「財」としてやりとりされる交易関係が、なぜ・いかにして資本制に組み込まれたのか。この二重の問いが解かれなければ、歴史理論たりえないことは言うまでもありません。

とはいえ、ルービンの論文は、資本制的労働をジェンダー・セクシュアリティの問題設定として考える際の批判的な導入口として有効だろうと思います。非常に一般的かつ抽象的な論と、アメリカ合衆国におけるジェンダーの政治、セクシュアリティの政治の次元での主張が混在しているため、なかなか私たちの論議の領域に持ち込むことは難しくみえますが、ジェンダーとセクシュアリティとを切り離さず、しかしたんに並列して論じていない点で、私たちにとってその方法は有意義なのではないでしょうか。

というのは、本書を讀んでの一番の感想として言うのですが、「労働のジェンダー化」というタイトルがすばらしいと思う一方で、三種の神器とは言いませんが、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティが、その概念群がなぜ必要あるいは必然であるのか提示されないままに論じられている観が否めないからです。キーワードの羅列で何かを言ったように装うことは実に下品なことだと思います。急いで付け加えると、本書が下品だと言っているのではありません。しかしながら、何故に並べて論じられなければいけないのか。ジェンダーやセクシュアリティを批判的なツールとして使う場合に、きちんと奥底まで届き、状況をえぐり出すようなカテゴリーや概念として使う「場」は、どういう「場」なのか。

これは、次のような、しばしば私たちが陥りがちな傾向に対する自戒として考えるべき問題でしょう。つまり、ジェンダーを労働との連関で問題化すると、セクシュアリティが後景化してしまふ。また、セクシュアリティを労働との連関で問題化すると、ジェンダーの観点が薄らいでしまふ。排他的とは到底思えない(しかし互いに相対的に自律している)二つの観点が、どうして労働という媒介項を経るとあたかも排他的なようになってしまふのでしょうか。

無い物ねだりをしているのではなく、この苦闘の結果として出てきているものが、どういう意味を持っているかを、私たちは受け止めるべきだと言いたいのです。あれが足りない、これが足りないという批判ではありません。そうではなくそれを受け止めた上で、何故にそれがなかなか語ることができないのか。結合させて新たな可能性として提示することができないのかをめぐっての実証的、理論的な研究の課題が出てくるわけであって、それがずれてしまったところが、この論集を讀んだ私にとって大切なものだったと思います。

本筋に戻りましょう。再生産の概念がアンペイドワークの議論の場合にも、セックスワークの場合にもきわめて大切です。

セックスワークの場合はこうなります。相手の身体を金銭と引き換えに「所有した」という観念をいだき、「商品」への支払いをおこなった買春者である限りにおいて、当然の請求権の行使として相手に暴力さえ振るうことができると思うような男たちが、その行為において何を得ているか。ある種の「労働力」の再生産です。「労働力」と限定をつけることが問題であるとし

たら、その後の労働能力をふくむ「活力」の賦活 = 再生産を求めていると広く考えることができます。

ヘテロセクシュアルなカップルにおいては自分のパートナーとの間に起こる関係形成の一環として、しかしサービスの色合いを強めた「愛の労働」、セックスワークが存在しえます。カップルが夫婦であれば、社会契約のユニットとして道徳的に認められ、法的にも保護された「家族」的な条件のもとに当該行為は位置づけられることとなります。

しかし再生産されるべき何物かは（それが権力関係におけるセックスワークであるという限定をつけるべきでしょうが）、つねにセックスワークに関わる両者の間での決定的な齟齬、非対称性によって、一方にしか、つまりここでの例においては買春者なり夫なりの側にしか生成されません。もう一方の側、セックスワーカーや妻の側に何が再生産されるのでしょうか。搾取の問題をたてうるとすれば、再生産をめぐるこの点が力の場として考えられなければなりません。

とはいえ、再生産論を持ち込んだからといって、何かすばらしいものが出てくると言っているのではないことを強調しておきたいと思います。多面的な論点を切り口として結合・配置することによってしか、解明され批判され覆されるべき問題の根幹に届くことはないと考えからず。

さて、グローバルなレベルに関する論議を後回しにしてきましたが、私の専門領域からしても、それに触れない訳にはまいりません。第三世界において、アンペイドワークは「主婦化」に直結させられており、社会的で差別にみちたヒエラルヒーがその運動を支えていることは明らかでしょう。その意味で、ベンホルト = トムゼンが対象とした地域の状況は、さまざまところで同時に生起しています。

しかし彼女の論議を、日本のような帝国主義の足下に生きている私たちが、一定疎遠なものであるがゆえに、「第三世界」の状況のエッセンスとして受け止めることには少々注意が必要です。なぜならば、内戦をはじめとした激しい暴力状況のさなかでは、コミュニティレベルではっきりと見えてくる事態が存在し、それらを切り捨てることはできないからです。ヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りれば、「非常事態」が「通常事態」に化した苦境を生きる多数の人びとがあり、それらの人びとはけっして例外状況にいる異例の存在ではないわけです。そうした状況下にあっては、主婦化さえも許されない女性たちや、内戦に追われて越境した結果、セックスワーカーとして働く女性たちがしばしばいます。

36年間にわたって内戦がつづいたグアテマラの有名な観光都市の近くの売春宿は最底辺のセックスワーカーが住み込み働いている場所ですが、それらのセックスワーカーは、同様に内戦に苦しめられ、生き延びるために国境を「不法」に越えてきたエルサルバドルの女性たちばかりです。そして、HIVのキャリア、エイズの発症者が、彼女たちのほぼ100%占めており、その多くがアンペイドワークというよりも奴隷労働に近い状態におかれています。最悪のセックスワークが、アンペイドワークの条件と結合されてしまっているわけですが、そうした事態は私たちの視野にはなかなか見えてこない。

ここで考えたいのは、アンペイドワークとセックスワークとが、私たちの議論の場においてしばしば分かれて論じる対象として見えてしまうのはなぜか、ということです。そこから始

められる問題はおそらく、周辺部から中心のあり方に対して攻め上げるような問題設定として、セックスワーク、アンペイドワークをグローバルなレベルでも、我々がそれぞれ生きている場においてもたどりつく問題であろうかと思います。

最後にここで紹介したいのは、ヤン・ムーリエ・ブータンの『奴隷制から賃労働制へ』における主張です。伝統的なマルクス経済学の理論は、まず中核的な集合的労働者としての産業労働者が形成された周辺に、「産業予備軍」たる相対的過剰人口が付随的に形成されるとしてきました。ところがヤン・ムーリエは、ルイ・シュヴァリエが『労働階級と危険な階級』(邦訳はみすず書房から刊行されている)で描いた「生物学的なドラマ」を演じる周辺の民衆・下層の人びと、つまり都市へと流れ込んできたさまざまな地域からの人々を、論の主人公にもってきています。

その人びとは良知力がウィーン1848年革命を論じる際に決定的に重視した「ボヘミアン」、まさしく言葉どおりの賤民としてのプロレタリアートであり、ひらたく言えば「有象無象」です。秩序だった存在にはなれないそれらの「有象無象」を、「危険ではない閾値」のレベルで支配の技法として「上手に抑え込む」ようなある種の「社会契約」を、秩序維持・治安問題として形成し、その「社会契約」が、労働者階級に対しての資本-賃労働関係の基礎的な枠組みのモデルになっている。これがヤン・ムーリエの論です。この観点はとても興味深く、また、重要だと思います。

それは「中心が先んじてつくられ、その後周辺がつくられる」という思考にたいする決定的な批判だからです。その批判とはつまり、周辺を周辺たらしめる力によってこそ、中心ができていくという観点です。この観点を敷衍すると、一旦そのメカニズムが軌道に乗れば、中心と周辺という支配関係の両項は、同時に相互規定的に分節化を繰り返す、という論をたてることも可能でしょうし、その論は十分に検討に値します。アンペイドワークとセックスワークに対しても、この論はパラフレーズできるのではないのでしょうか。

セックスワーク、アンペイドワークはまず周辺化され、排除され、抹消され、不可視化されることをつうじて近代資本制の社会に埋め込まれ、その後継的に反復されてきた。そう考えるならば「周辺」と「中心」のありようを決定的に根底的に揺るがすような作業が必要だと思います。

グローバルな次元においても、個々の現場においても、セックスワークもアンペイドワークも基本的に(少々修辭的ではありますが)「無権利状態」におかれ、周辺化されてきた。そうした労働における排除と周辺化そのものが、賃労働をヘゲモニー的に永続させ労働の中心の座に祀り上げながら、中心をつくりあげてきた。このように措くならば、「労働」からの排除と周辺化につねにさらされてきた、アンペイドワークとセックスワークは、その周辺性のゆえにこそきわめて転覆的な可能性を有しているのではないかととらえることができるのではないのでしょうか。

